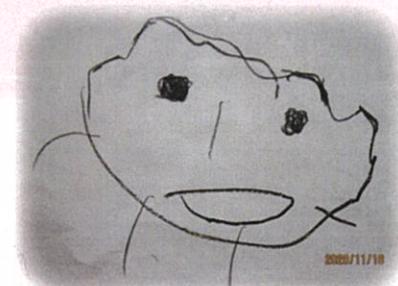
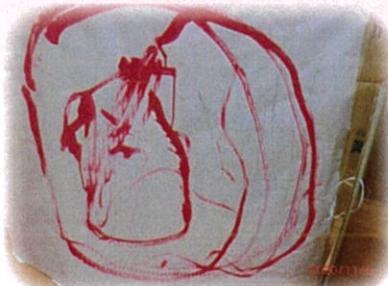
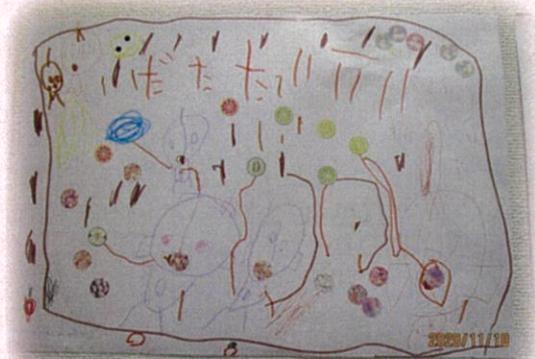


## 子どもたちの作品集



麻布乳児院だより 創刊号

広報12月24日 創刊号

# 麻布乳児院 Azabu infant home だより

令和2年12月24日発行

発行／麻布乳児院 東京都港区南麻布5-1-20

- わたしたちの「理念」
- ・個性の尊重
- ・心身の健全な発達促進
- ・家族や地域社会との連携

〒106-0047  
東京都港区南麻布5丁目1番20号

みんなの手を  
合わせてみてください



4ヶ月の赤ちゃんの手足  
実物大です

### 主な記事

- 1 子どもの声
- 2 お引越し
- 3 栄養士からのお便り
- 4 養育支援指導員からのお便り
- 5 里親交流の歩み
- 6 ボランティアの方への感謝
- 7 創刊号院長挨拶
- 8 編集後記

広報誌「麻布乳児院だより」では、社会的養護の元にいる子どもの声をお届けすることを主眼としています。社会の一員として、ともに子どもの声に耳を傾け、一緒に考えていきたいと思います。

## 0歳の乳児の声



生後1か月半のAくん。新生児のときから、泣き始めるとき抱っこをしても中々落ち着くことができませんでした。一度泣きが強まるとき、身体を突っ張らせてますます激しくなるばかりで、どんな風に関わると落ち着けるだろう…と模索していました。そんなとき、子育て経験のある養育者が新しく仲間入り。泣いているAくんを抱っこすると、間もなく泣き止みました。すっと力を抜いて気持ちよさそうに眠りだす、安心できた瞬間を垣間見ることができました。

Aくん：トク…トク…（心臓の音）…  
きこえるな…  
なんだかお腹とお胸… ほっぺもあったかいな…  
気持ちいいな…  
ふう…眠たくなってきちゃったな…

Aくんは何を感じたのでしょうか。感じていると身体が意識されます。

## 1歳の声



お散歩中の1歳6ヶ月のBくんです。養育者と手をつないで楽しそうに歩きます。養育者が「お花あるよ」と花壇を指さして伝えると、「おはな」「おはな」と何度も繰り返し、興奮した様子で指さしていました。少し眺めていると、紫色の花を指さして「あお」とおしゃってくれました。養育者が「ほんと、青みたいだね。あれはね、むらさき、っていうんだよ」と返すと、黄色やピンク色の花を指さして、「これは?」と聞いてくれました。養育者が「これはきいろ」「これはピンク」と答えると、満足した様子で再び歩き出しました。

Bくん：ん？ わあ、おはな あった！  
これはあお！ …むらさき？ ……  
こっちは？ …こっちは！ ?……  
いろんな色のお花があるんだなー！

注意を向けて、よく観察していることがわかります。そして「違う」を見つけました。「知るよろこび」を胸いっぱいに感じる。そんな機会をたくさん体験してほしいと思います。

## 創刊号院長挨拶

本日ここに「麻布乳児院だより」創刊号を発刊し、関係者の皆様方のお手元に届けることが出来ましたが、これは「麻布乳児院」の新たな1ページを開くものになるものと思っております。

この「麻布乳児院だより」を通じて、「麻布乳児院」から多くの関係者の皆様方に、様々な子どもたちが発信する「声」をお伝え出来ることになりますので是非お目通いいただきたく思っております。

麻布乳児院は明治24年に前身である「婦人共立育児会」が創立され、小児の診療救済事業を開始したことを嚆矢として、その後大正15年に現在の地に移転し乳児診療及び保育事業を行ってまいりました。戦後は昭和23年に麻布乳児院が正式に認可され、さらに昭和28年に「社会福祉法人恩賜財団慶福会」と合併して、現在の「社会福祉法人恩賜財団慶福育児会」となって、老朽化した施設を改築し平成3年に現在の施設が完成、当初は定員80名でスタートしましたが、令和2年度からは定員70名で運営しております。

麻布乳児院の事業運営は「個別の尊重」「心身の健全な発達促進」「家族や地域社会との連携」を基本理念として、職員が一丸となって子どもたちが愛されていることを実感できる養育に努めています。

乳児院に求められる機能も大きく変わってきており、都道府県社会的養育推進計画においては、家庭的養護の一層の充実、里親委託の推進等乳児院の多機能化等に取り組んでいくこととしております。一方で、今年は新型コロナウィルスが世界的にパンデミックを惹起する中で、東京都では依然として収束の方向が見えず、面会等を制限せざるを得ない等保護者の皆様方にも多くな迷惑をおかけしておりますが、子ども達の安心・安全を最優先に考えて感染予防に取り組んでおります。

この「麻布乳児院だより」を作ると決めてから、編集長をはじめ編集委員の皆さんは、日々子どもたちと向き合う忙しい業務の合間に企画・立案・編集業務に取り組んでこられ、漸く発刊の日を迎えて皆様方に「創刊号」をお届けする事が出来ましたことに心から感謝しております。

最後になりますが、編集にご協力いただいた全て職員の皆様並びに多くの関係者の皆様方のご協力に心から感謝申し上げます。

## 創刊号発刊によせて（編集後記）

2020年12月、ようやく皆さまのお手元に「麻布乳児院だより」をお届けすることができました。ご覧いただき、どのような感想をお持ちになったでしょうか。「子どもの権利に関する条約」（子どもの権利条約）が1989年に国連で採択されてから、2019年で30年目、日本政府が批准して25年目となりました。私たち乳児院職員は、子どもの「声」を聴くことができているのだろうか…、子どもの声って何だろう…と日々考えています。

そこで今回、広報誌発刊にあたって、「大人」の立場から見える「子どもの声」ではなく、今この瞬間、目の前にいる子どもがどんな風に感じているか、子どもからはどんな景色が見えているのか、身体ではどんな風に感じられているのか…まるで変身したかのように、私たち大人がまず「子ども」になりきって感じてみるとから始めよう！と考えました。それが「0歳の声」などのアイデアに繋がっています。「麻布乳児院だより」は始まったばかりです。「子どもの声」を探求し、皆さまと対話し、クリエイティブに取り組んで行きたいと思っています。ご感想やご意見なども、麻布乳児院職員にどうぞお寄せください。さまざまな声に耳を傾けていきたいと思っています。

また発刊にあたって、他の乳児院の方にもご協力いただきました。困ったときに聞くことのできる横のつながり（ネットワーク）に支えられています。最後になりましたが、乳児院を支えてくださっている関係機関の方々やボランティアの皆さん、職員の家族、友人、知人の方々にも感謝申し上げます。今後とも、麻布乳児院をどうぞよろしくお願い申し上げます。

社会福祉法人恩賜財団慶福育児会

麻布乳児院

〒106-0047 東京都港区南麻布5-1-20

(地下鉄日比谷線広尾駅4番出口、徒歩1分)

電話 03(3446) 5361 FAX 03(3448) 1419

## 里親交流の歩み



初めて乳児院に訪れる里親さんは皆さん、子どもとの出会いに期待や喜びを感じいらっしゃいます。乳児院での里親交流が進み、子どもとのつながりが感じられるにつれて、里親さんは思いもよらない感情に襲われるときがあります。それは「この子を見ていけるのか」という感情です。

里親宅での生活が始まり、関係を築いていく中で、子どもは「どれだけ自分を受け止めてくれるかな」という思いで、感情を里親さんに爆発させていきます。子どもたちの感情は様々です。「今までいたお部屋と違う」「今まで抱っこされていた腕の感覚じゃない」「何かが違う」…新生児であれば4歳児であれば、今までいた環境とは全く異なる場面に置かれることで、不安や苛立ち、悲しみに似た感情が芽生えます。そんな感情を自分で上手にコントロールできず、うまく言葉で伝えられない中、自分に向き合ってくれる里親さんへの感情を爆発させます。

そんな期間が半年から1年くらい続くこともあります。それはまるで、胎児のときお腹にいた期間と同じくらい、はたまた乳児院にいた期間と同じくらいの時間を一からやり直すように過ごしていると感じるときがあります。「育て直し」「赤ちゃん返り」「試し行動」…いろいろな表現がありますが、そのような期間の真っただ中に里親さんが置かれてしまうと出口のないトンネルを延々と歩き続けているような感覚に襲われてくるかもしれません。

ただ、それはいつまでも続きません。必ず出口が見えてきます。自分のいるトンネルの中がよく見えるよう懐中電灯を使ったり、気持ちを落ち着かせようと歌を歌ってみたりするように、家族や友人に話してみたり、行政のサービスを使ったり、泣き止まない子どものそばで好きな歌を歌ってみたりして、自分の気持ちを大切にすごしてもらいたい、と日々感じています。

（里親交流支援員）

## ボランティアの皆様、いつもありがとうございます



植崎由紀子さま 福川楨子さま 神野雅子さま 鈴木昌子さま 高石勝子さま（順不同）

聖心女子学院の保護者のボランティア活動をきっかけに、40年以上、食事用エプロン、よだれかけ、おむつマット、バスマット、乳児用ヘッドマット、乳児用いすのカバー、子どもたちのミニバックなど、乳児院のありとあらゆるお裁縫をしてくださっている「ゆりの会」の皆様の作品です。

「（乳児院に）楽しみで来ています」とおっしゃってくださる皆さまは、いつも和気あいあいとした雰囲気。代表の植崎さんは「私たちが好きなことをして、こうやって人様に喜んでもらえることがうれしいんです」と、長きにわたり楽しく活動する秘訣を笑顔でお答えくださいました。

乳児院はたくさんのボランティアの皆様に支えられています。またこの間、新型コロナウイルス感染症対策における物資のご寄付もいただいています。誠にありがとうございます。麻布乳児院では、毎号ボランティアの皆さまを紹介させていただき、感謝の意をお伝えしたいと思っています。

## 2歳の声



大人の動きをよく見ています。そして同じようにやってみたい！できる！と挑戦し、言葉かけを通して自分の行為を見てもらっていたことを知ります。うれしい気持ちがこちらにも伝わってきます

## 2歳の声



お手伝いが大好きな2歳0ヶ月のCくん。養育者が洗い物をしていると「コップ、きれい？」とお手伝いをしてくれます。初めは水遊びでしたが、何度も行う内に泡をきれいに流してからコップを渡してくれるようになりました。養育者が「お手伝い、ありがとう。すごいね！上手にできるようになったね」と言うと、とても誇らしげで、うれしそうな表情をしています。できなかつことができるようになつた喜びや、相手が笑うと自分もうれしい気持ちになることを感じながら、日々成長しています。

Cくん：おみず ジャーね！  
あわあわ、ないないねー…  
みて！！ きれいになった！  
うれしいねー！！

2歳6ヶ月のDちゃん。コロナ感染対策で外出する機会がなかなか作れない今日この頃、室内で絵具を使ってお絵描きをしました。絵筆の使用に限らず、スポンジに塗ってスタンプにしたり、顔や腕に広げたりして感触を楽しんでいました。時折、作業の手を止め、養育者と顔を見合わせて「見て！」と知らせてくれる姿が微笑ましく、気持ちのままに伸び伸びと表現する姿がとても印象的でした。

Dちゃん：ここにこう…こんどはこう…  
上手にできた！見て見て！  
手に塗ると…少し冷たい…  
もっといろんなことやってみよう！

おそらくこの後に、手や腕・顔・足、新聞紙、床、お友達の紙にも、絵具の入ったコップもひっくり返して遊んだに違いありません。私たちも久々にやってみたいですね

## お引越し



4歳Eくんの大切なアルバムを、写真に撮らせてもらいました。ここには、一緒に過ごした養育者やお友だちと一緒に写った写真が入っています。

また、新しく住むお引越し先のお部屋や、お世話してくださる職員の方々の写真も入っています。

Eくんは引越し数日前に「行きたくないんだよ、ここがいい。○○（居室の名前）にずっといたいんだよ」と言葉にしました。

新たな出会いや体験も待っていて、楽しみもあるでしょう。子どもたちは、やがて新たな生活に慣れていくとも思います。ですが、「措置変更」は大人が作ったシステムです。

Eくんはうつむきながら、大人の正面に座って話し始めました。実際に、ここまで言葉でできる子どもは中々いません。同時に、思いを言葉に表しきれてもいいでしょう。

皆さんは「Eくんの声」から何を感じるでしょうか。

## 乳児院から児童養護施設への措置変更について

乳児院の入所期間は、現在、法律上では特に必要のある場合、就学前まで入所可能となっていますが、実際には慣例的に2歳までという認識で進められていることが多い現状です。しかし2歳の子どもは愛着を築いている真っ最中の時期ですし、2歳の子どもの理解力では到底お引越しを理解することができません。

システムが起こす「分離」を、どのようにしたら傷つきの体験にならずに、連続性のあるものにできるだろう…。麻布乳児院では、せめて発達段階が3歳を超えた頃に施設の移動を迎えるようにと近年考えるようになりました。愛着が安定し、移動について最低限ですが理解できるようになる発達段階です。そしてお引越しの後にも、乳児院の養育者と会える交流プランを考え進めています。お引越しの前には、養育者と共にアルバムを見ながら赤ちゃんの頃から過ごしてきた時間を振り返り、離れる寂しさを一緒に感じます。新たな出会いの楽しみも想像を膨らませます。そして「会いに行くね」「遊びにおいでね」と、2度と会えなくなるのではなく、また会えると約束します。それでも、子どもにとっては未知の世界、体験です。

社会的養護関係者は、この措置変更というシステムに「慣れ」ではないと思うのです。そして、一緒に考えていきたいと思っています。

## 栄養士からのお便り



### 食育の時間

食育は、子供達が食に興味を持ち、色々な食材に触れる機会が増え、今後の体作りにつながるように考えています。

子ども達と買い物に行ったり、旬の野菜や果物を買い、おやつや食事のお手伝いをしてもらひながら、一緒に楽しく作っています。

7月の食育の時間に、2歳の子どもたち2人とおにぎりお弁当を作りました。野菜を見せて「これなに」と問いかけると「きゅうり！トマト！」と答え、トウモロコシの皮は「ひげがいっぱい」と順番にむいてくれました。出来上がりまでに、にこにこ顔でつまみ食い。これができるのも楽しみのひとつです。

炊き立てアツアツごはんに好みのぶりかけを混せておにぎりを作り、いつもの食事時間より早めに「いただきます」と大きな声で手を合わせてご挨拶！お外には行けなかったですが、お部屋でピクニック気分でいただきました。

## 養育支援指導員からのお便り

麻布乳児院における養育支援指導員は、主に、養育者育成のためのアドバイザーの役割を担っています。初任養育者（入職から3年目までの養育者）の相談、悩み事等に応じたり、日中ひとりで担当する養育者の相談に応じたり助言を行ったりしています。そして一緒に子どもたちを見る中で、具体的に今日の活動をどうするか、一緒に考えたり提案することもあります。



このときは、牛乳パックに絵を描いて魚を作り、割り箸で作った釣り竿で魚釣りをしました。大きなタライに一齊に魚を浮かべると、魚を釣ろうと真剣に取り組む子どもたち。自分が作った魚を取られたくない！という気持ちが強まり、自分のパケツに大事に浮かべて置くだけの子どももいます。

自分で作ったもので遊ぶ楽しさを知り、自己肯定感が高まる活動・闇わりを大切にしたいと思っています。

耳を澄ませていると、実際の子どもたちの声がきこえてきそうです。

養育支援指導員の中には、ご自身の子育てをしながら務めている方もいます。同じように子育てをする者として寄り添いながら、少し客観的な立場から子どもたちの育ちを応援しています。様々な立場の人が、それぞれの視点や知恵を分かち合いながら、私たちも日々学んでいます。